様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３４５１２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０１９８

研究課題名（和文）２０世紀初頭～戦間期ロンドンにおける寄席と劇場の関係

研究課題名（英文）A Study of the Relationship between Music Hall and Theatre in 1900s-1930s London

研究代表者
赤井　朋子（AKAI, Tomoko）

神戸薬科大学・薬学部・准教授

研究者番号：７０３０９４３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、多彩な演目を上演していたヴァラエティ劇場に目を向けることにより、20世紀初頭～戦間期ロンドンにおける寄席と劇場の関係を明らかにしようと試みたものである。従来、大衆的な娯楽を提供していた演芸場と、台詞劇などを上演していた劇場は、切り離して考えられることが多かった。しかし実際には、高級な芸術と大衆的な芸能が共存する境界的な領域も存在していたのであり、本研究は、そういった異種混淆的な上演の場が、その後の新しい演劇文化の発展に寄与することもあったことを具体的に検証した。

研究成果の概要（英文）：The aim of my study is to examine the relationship between music hall and theatre in 1900s to 1930s London by focusing on the great diversity of performances at variety theatres in London. Scholars have traditionally separated the music hall, where popular entertainments were performed, from the theatre, where legitimate plays were staged. However, we can find some boundary areas where high art and popular entertainment coexisted. My study has concluded that this hybridity was one element that opened up new possibilities for the development of performing arts.

研究分野：人文学

キーワード：英国演劇　劇場　ヴァラエティ　レヴュー　劇場法

１．研究開始当初の背景

(1) イギリス演劇史における 20 世紀初頭から戦間期にかけての時期は、戯曲不作の時代と見なされることが多く、戯曲を重視する立場からは長らく等閑に付されてきた。しかし、研究の対象が戯曲から「上演」の方へ向けられるようになってきた近年においては、例えば Kerry Powell (ed.), *The Cambridge Companion to Victorian and Edwardian Theatre* (Cambridge Univ. Press, 2004)のような、上演を視野に入れたこの時代に関する研究書が刊行されるようになってきた。また、ストレートプレイ以外の非正規劇をよりポジティブにとらえ直すイギリス演劇史の研究書（例えば、Jane Moody, *Illegitimate Theatre in London, 1770-1840* (Cambridge Univ., 2000)）も目につくようになってきた。

本研究課題の背景にはこのような研究動向があった。

(2) 研究代表者は 2009～2011 年度に科研費の助成を受け、両大戦間期のイギリスにおけるレヴュー（歌、ダンス、寸劇からなる演劇の１ジャンル）について調査・研究を行った。その結果、本研究課題の着想につながる次のことが明らかになった。時代の変化とともに「寄席」の演芸が衰退し、それに代わるものとしてレヴューが数多く上演されるようになったこと。レヴューは言葉を用いないダンスと言葉を用いる演劇（対話劇）の両方を併せ持つジャンルであるため、寄席（ミュージック・ホール）と劇場の両方に関わっていたこと。そして、そのために、同じ作者や演技者が演芸場と劇場の両方において活動するなど、両者の間の境界線が曖昧になることもあったこと。

また、レヴューのプロデューサーとして有名であったチャールズ・B・コクランが、高級な芸術と大衆的な芸能のどちらにも高い関心を持ち、両者を同等に扱っていたことや、そのような感性が他の演劇関係者の間でも共有されていたことなどが、それまでの調査・研究により明らかになり、本研究の着想につながる有益な情報となった。

研究代表者個人の学術的背景としては、以上の点が指摘できる。

２．研究の目的

20 世紀初頭～戦間期のイギリスにおいては、演劇や演芸が、映画やラジオ等の新しいメディアの登場により、さまざまに変化を余儀なくされていたが、本研究は、その変化の過程において新たに産み出された多様な演劇文化の一部を明らかにすることを目的とした。

具体的には、ヴァラエティなどの娯楽を提供していた演芸場が、より劇場に近いものへと質的に変化することにより、音楽劇やダンスなどの分野にいかなる可能性を開いたのかを探ることであった。

また、社会の変化（産業構造の変化や人々の生活様式の変化、郊外の住宅地の拡大、都市文化の発展等）と劇場や演芸場の変化（演目や観客層の多様化、劇場と演芸場の関係における変化等）が、どのように関連し合っていたのかを分析することにより、演劇と社会の関係を明らかにするのも１つの目的であった。

３．研究の方法

(1) ロンドンのレスター・スクエア界隈には、演芸場なのに「劇場」と呼ばれるようになっていったミュージック・ホール（すなわちヴァラエティ劇場）がいくつか点在していた。そのような演芸場は比較的幅の広い観客層を対象に多彩な演目を提供していたが、本研究ではまず、具体的にどれほど多彩な演目であったのかを確認するために、主なヴァラエティ劇場の上演プログラムをいくつか収集することにした。これは主にヴィクトリア＆アルバート美術館の演劇コレクションを調査することにより行った。

(2) ロンドンのヴァラエティ劇場の中から１つのヴァラエティ劇場を研究対象として選び、上演演目だけではなく、経営者の方針や、演劇史的に重要な出来事、出演者の経歴等について具体的に調査した。そして、収集できた情報をもとに、寄席と劇場の関係という観点から分析した。具体的には、1904 年に演芸場として建設され、1931 年に劇場へと格上げされた、現在はオペラ劇場として使用されているロンドン・コリシーアムをとりあげて、その創設者であるオズワルド・ストールの伝記や当時の関係者による回想録、劇評や観劇記、新聞記事等の歴史的資料を調査することにより実施した。

(3) 寄席と劇場の関係という観点から画期的であったと思われる出来事や作品等を具体的にとりあげ、調査した。具体的には演芸場に出演した正規劇俳優に焦点をあてて、演芸場（ヴァラエティ劇場）に出演するようになった経緯や出演したストレートプレイの作品、出演の際の反応等を、回想録や伝記、劇評や新聞記事等を中心に調査した。

(4) レヴューという歌、踊り、寸劇からなるジャンルについて、上演された場所との関係から調査・研究を行った。すでに上で述べたように、レヴューは言葉を用いないダンスと言葉を用いる対話劇の両方を併せ持っていたために、演芸場と劇場のどちらとも関わっ

ていたジャンルであった。したがって、寄席のレヴューと劇場のレヴューが互いにどのように異なっていたのか、あるいは、互いにどのように影響し合っていたのかに関する情報を集めることにより、両者の間の境界領域について分析した。

４．研究成果

(1) ヴァラエティの拠点であったロンドン・コリシーアムについて、「ロンドン・コリシーアム―ミュージック・ホールから劇場へ―」と題する論文にまとめ、『ロンドンの劇場文化―英国近代演劇史―』（共著、藤岡阿由未監修）に掲載した。現在はオペラ劇場であるこの劇場がかつてはヴァラエティ劇場であったことに着目し、後に劇場へと変化する演芸場という側面から分析した。当時の観客層の変化や劇場法にまつわる状況の変化をとりあげることにより、このミュージック・ホールがいかに劇場に近いものへと変化していったのかを指摘した。また、そのことを示す１つの例として、正劇俳優であったアイリーン・ヴァンブラがロンドン・コリシーアムでヴァラエティの出演者の１人としてJ・M・バリ作の一幕劇『12 ポンドの目つき』に主演したことをとりあげた。そして、高級文化と大衆文化の共存を可能にしたヴァラエティ劇場の特異な上演形態がその後の演劇文化の発展に寄与していたことを論じた。

(2) 歌と踊りと寸劇からなるレヴューというジャンルが、20 世紀初頭から戦間期にかけての時期に、どのように外国から移入され、イギリス独自のレヴューへと発展していったのかを論文にまとめた。特に本研究のテーマである「寄席と劇場の関係」という視点を取り入れ、巨大なヴァラエティ劇場における見世物的なレヴューと時事諷刺を含んだ小劇場におけるインティミット・レヴューの２つのタイプのレヴューが、どのように関連し合いながら、ロンドンのレヴューが形成されていったのかをたどってみた。その成果は、2015 年 6 月に刊行予定の中野正昭編『ステージ・ショウの時代（仮題）』（共著）において「チャールズ・B・コクランとロンドンのレヴュー」と題して公表されることになっている。

(3) ヴァラエティ劇場の調査を進める過程において、早稲田大学演劇博物館所蔵の坪内士行コレクションを調査する機会に恵まれた。その結果、坪内士行のイギリス留学中の観劇内容が具体的に明らかになった。ちょうど、日本演劇学会が宝塚歌劇 100 周年を１年後に控えた 2013 年に「宝塚歌劇と世界の音楽劇」というテーマで全国大会を開催したので、その機会を利用して「1910 年代ロンドンのヴァラエティ劇場--坪内士行の見たレヴュー―」と題する研究発表を行った。宝塚少女歌劇団の顧問として作品の創作や演出に携わっていた坪内士行がイギリス留学中にヴァラエティ劇場においてどのような作品をロンドンで観劇していたのかを、特にレヴューとバレエを中心に具体的に報告したので、大会テーマとも関連の深い研究発表となった。

(4) ノエル・カワードが台本を書き主演した 1928 年のレヴュー『この恵みの年！』をとりあげ、調査した結果を研究ノートにまとめて勤務先の紀要に掲載した。上演の場所であったロンドン・パヴィリオン劇場は、かつては労働者階級向けのミュージック・ホールとして使用されていた古い建物であったが、プロデューサーのチャールズ・B・コクランにより、知的で芸術性の高いレヴューの上演にふさわしい劇場へと改築された。レヴューというジャンルが寄席より劇場とより親和性を持つようになっていった例として、報告することができた。

(5) 『イギリス文化事典』（丸善出版）の第５章（演劇）を分担執筆した。具体的には、ヘイマーケット劇場について見開き 2 頁分の文章にまとめた。かつては勅許劇場であったこの劇場は、現在でもストレートプレイ（中でも諷刺的な内容を持つ喜劇）を多く上演し続ける中規模の劇場である。他の勅許劇場と違って現在でもそのような台詞劇の名作が名優たちによって上演され続けている理由を、この劇場の歴史的背景と結びつけて解説した。寄席と劇場の関係の研究に取り組む過程において、正規の劇場についてあらためて調査しまとめたことは有意義であった。

戯曲の形で作品内容を知ることのできないヴァラエティやレヴュー、ダンスといった分野の調査には、予想以上に困難が伴うこともあったが、それでも研究開始当初には予想しなかった収穫を得ることもあり、全体としてはそれなりに成果をあげることができた。本研究は専ら実証的な方法によるものであったが、それまで等閑に付されてきた分野について、新たな視点から具体的にいくつかの点を明らかにできたことは大きな成果であり、また、今後の演劇研究や劇場研究にとっても示唆的なものになると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 赤井　朋子、チャールズ・コクランの『この恵みの年！』―イギリス 1920 年代のレヴ

ューに関する覚え書き―、神戸薬科大学研究論集　Libra、査読無、13 号、2013、1-26

〔学会発表〕（計３件）
①　赤井　朋子、ヴァラエティ劇場時代のロンドン・コリシーアム―寄席と劇場の関係―、英米文化学会例会、2013 年 11 月９日、日本大学（東京）

②　赤井　朋子、ロンドン・コリシーアム―ヴァラエティ劇場時代（1904～31 年）―、英米文化学会分科会「イギリス近代演劇と劇場」、2013 年 7 月 13 日、明治大学（東京）

③　赤井　朋子、1910 年代ロンドンのヴァラエティ劇場―坪内士行の見たレヴュー―、日本演劇学会全国大会（大会テーマ「宝塚歌劇と世界の音楽劇」）、2013 年 6 月 22 日、共立女子大学（東京）

〔図書〕（計３件）
①　赤井　朋子　他、森話社、ステージ・ショウの時代（仮）、2015、印刷中（共著）

②　赤井　朋子　他、朝日出版社、ロンドンの劇場文化―英国近代演劇史―、2015、234（113-140）

③　赤井　朋子　他、丸善出版、イギリス文化事典、2014、906（252-253）

６．研究組織
(1)研究代表者
赤井　朋子（AKAI, Tomoko）
神戸薬科大学・薬学部・准教授
研究者番号：７０３０９４３３